

沖縄地理学会会報 ● 第 68 号

2018 年 6 月 20 日発行



編集・発行 沖縄地理学会 © 発行人 小川 護
OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)
事務局 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
琉球大学国際地域創造学部 廣瀬 孝研究室気付
電話 098-895-8191 eメール info@okinawachiri.sakura.ne.jp
ホームページ <http://www.okinawachiri.sakura.ne.jp/index.html>
振込口座 02040-4-4697 (加入者名：沖縄地理学会)

2018 年度 沖縄地理学会大会で「沖縄と地域振興」 7 月 28 日（土）沖縄国際大学で開催

2018 年度沖縄地理学会大会・総会を、2018 年 7 月 28 日（土）、沖縄国際大学で開催します。大会では、一般研究発表（口頭発表／ポスター発表）のほか、シンポジウム「沖縄と地域振興」を開催します。一般研究発表を希望される方は、下記に従ってお申し込みくださいますようお願いいたします。

記

- 開催日時：2018 年 7 月 28 日（土）
10：00（開始予定）～17：00
- 会場：沖縄国際大学 5 号館 1 階 106 教室
- 一般研究発表（口頭発表／ポスター発表）
の申し込み方法、締切：

(1) 発表者名、(2) 発表タイトル、(3) 口頭発表／ポスター発表のいずれかを明記してください。発表要旨は発表申し込み時には必要ありません。（発表内容の要旨を「会報」69 号に掲載しますので、大会終了後にそのご執筆についてご依頼いたします。）口頭発表（質疑を含む）は 15～20 分程度を予定しています。発表希望者は、7 月 9 日（月）までに、つぎの学会事務局に申し込んでください。

- 学会事務局：〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地 琉球大学国際地域創造学部 廣瀬 孝研究室気付（電話：098-895-8191／eメール：info@okinawachiri.sakura.ne.jp）

● 2017 年度例会報告

● 沖縄地理学会巡検報告：「大山を歩いてみよう」

2017 年 12 月 16 日（土）午前 9 時～12 時、宜野湾市教育委員会文化課主催の第 17 回『イガル一・シマ文化財教室』の一環で、大山区の巡検が実施された（共催：沖縄地理学会）。テーマは「大山を歩いてみよう」であり、案内者は崎浜 靖会員であった。参加者は 30 人余で、宜野湾市の住民を中心に、学生の参加者もみられた。

参加者は宜野湾市博物館に集合し、館内の常設展示室において、宜野湾市教育委員会文化課職員 2 名と崎浜会員により、宜野湾市全域の地形・水文環境・土地利用・考古等の説明がなされ、その後、大山区まで歩きながら、湧水地、旧道、碁盤型集落の特性などを見て回った。後半は、戦前の大山区の屋敷地の復元図を用いながら、上具志川家、大山御嶽碑、大山貝塚の地理的・歴史的特性を確認した。本巡検は、大山区の歴史地理に主眼を置いた巡検であった。

（文責：崎浜 靖）

小特集 ● 沖縄経済学会との共催シンポジウムにむけて

2018 年 7 月 28 日（土）沖縄国際大学で開催される沖縄経済学会との共催シンポジウム「沖縄と地域振興」にむけて、沖縄経済学会や本学会の会員の数人に関連するエッセーを執筆してもらいました。

経済学・地理学の学際と学窓から描く沖縄三十六景と化学反応

宮平 栄治（名桜大学）

国際経済学の知見から、ある地域の経済成長や産業構造を規定するのは、人口、所得や消費意欲を投影した経済規模、起業家精神を育成する社会や制度、技術革新、国外や域外からの技術移転や所得移転、輸送費の変化、当該地域の天然資源や人材など要素賦存状況、そして、移輸出した財でどの程度の移輸入財を購入できるかという交易条件などの内生的および外生的な原因や要因による。経済地理学の知見から、マーケットからの距離、資源や製品の輸送費、資源の製品化率、資源の賦存状況である。

沖縄県は、島嶼地域である。しかも、香港やシンガポールと違いマーケットや生産地という後背地はない。また、狹隘でユーラシアプレートとフィリピンプレートに沿って南西方向に点在している。そのため、市場・生産地への、または、市場・生産地からの輸送は重厚長大な製品は海運、軽薄短小な製品や生鮮品や空輸で行うため、輸送コストが相対的に高くなる。また、沖縄地域内では製品製造量が少ないため、他地域から沖縄地域へ物資を輸送したならば帰りは空となり、コストが上昇する。

このように島嶼地域である沖縄は、香港やシンガポール比べると市場や生産の観点から不利な状況にある。しかしながら、沖縄の状況をどのように描写するかは、われわれの筆致次第である。たとえば、ハワイでは今年 5 月、キイラウエ火山が噴火した。傍目でみれば、火山噴火は財産や人命を奪う自然災害である。ところがハワイはこの厄介な自然現象を克服しようとして火山学や地震学が発展した。太平洋津

波警報センターが設置されているのもハワイのオアフ島である。その恩恵は、沖縄をはじめ、太平洋の島々や国々の人々に及んでいる。

筆者は、経済発展と成長のカギは、英知、哲学、ビジョンおよび起業家精神に富む人材とチーム、そして、寛容な心と多様性の認知と発展へ変換する吸収力としたたかさにあると考えている。一方で、経済発展と成長は、格差を拡大させる。そのため、経済発展と成長の果実をどのように公平かつ公正に分配するかが課題となる。幸い、沖縄には「ユイマール」という利益を独占せず、共有するというソーシャル・キャピタルがある。この互酬性によって、ハワイやブラジルへ渡った沖縄系移民の方々の一部は、移住先で社会的な地位を築いている。

葛飾北斎が富士山をさまざまなアングルから描写した「富岳三十六景」のように、沖縄をさまざまな角度から描き、可視化し、深掘りし、理論化することが必要とされている。加えて、社会科学を研究する者は、研究成果を、成長と平等という相克関係を克服し、衡平な社会制度基盤を創り上げる方向を示す哲学、理論的支柱、法へ整える梁、制度化する屋根、状況見渡すビジョンとなる窓、利害関係者を招き入れる扉、調整するラウンドテーブル、調光と風通しによる心地良い環境を整備することも求められている。

今回のプログラムによって、経済学者と地理学者が相互に交流、沖縄を描き合うことでプラスの化学反応が生まれることを確信している。

地域における潜在的資源の活用と地域振興 平敷 卓（沖縄国際大学）

全国各地において、地域資源を活かした地域振興の取組は多々あるが、その中でも古くからある街並みや集落、農山村の景観、祭りなどの伝統文化、食文化を観光資源として活用し、それらを滞在・体験型の観光メニューとして提供する地域づくりが進んでいる。こうした取組は、マス・ツーリズムからオルタナティブ・ツーリズムへの観光形態の変化の中で一般化しつつあるが、「まち歩き」、「フットパス」、「オルレ」など「歩くこと」をキーワードに、地域を散策し、地域固有の景観や歴史、生活文化や営みを再発見し、価値付けしている点で共通している。つまり、必ずしも観光地として認識されていない生活圏内のまさに「足元」の地域資源を再評価し、地域づくりに役立てようとするものである。こうした動きは地域に観光客を呼び込み地域振興に役立てるという意味以上に以下の点で今後の地域づくりに欠かせない取組となってくるものと考ええる。

地域づくりという点では、誘客のための有形の地域資源の再発見と創出を主目的としがちであるが、そこでの重要な意義は地域住民が普遍的に有している生活環境の改善に向けたポテンシャルを引き出すことにある。地域づくりのプロセスにおいては、地域住民の主体的で継続的な取組が必要となる。そこで、地域住民の関わり方は、地域づくりの持続可能性を占う意味で重要となる。

地域住民は自らの地域を観光客という外部者の目を通して再評価し、自らの住む地域を生活者としてより良くするための活動に還元し

ていくこと、行政は関係機関の活動支援とともに住民に地域づくりの参加の場を提供し、関係機関と住民の協働するプラットフォームを提供する役割を担う。これらの協力を通して、行政任せの「地域づくり」から地域住民の生活環境改善に向けた主体的な取組みに昇華させ、全体として魅力ある地域を形成し、地域活動そのものの活性化が観光客を呼び込む観光資源になるという好循環を生み出すものと考ええる。

沖縄県内に目を向ければ、北中城大城のスージグアー週末美術館、南城市のオープンガーデンなど、民家の庭や集落内の生活景観を活用した地域づくりの取組として好事例と言える。いずれも地域住民と関係各所の協力が必要な取組であり、地域内外の協力の下で継続的・発展的に展開されており、県内の他地域においても同様な取組が広がりつつある。

今後の沖縄県における地域づくりに向けて必要な課題は以下の点であろう。地域づくりが総合的な取組であると捉えた場合、「景観」や「観光」、「環境」、「防災」、「コミュニティの形成」といった様々なアプローチから取り組んでいく必要があるが、そのことはつまるところ、関係各所の連携を図るためのプラットフォームを必要とすることを示している。地域づくりには、地域住民、市民団体はもちろんのこと、行政、商工会、観光関連団体、企業、大学等の取組と同時に、更に、それらを効果的にコーディネート出来る人材や仕組みづくりが必要となるだろう。

地域振興と観光振興 上江洲 薫（沖縄国際大学）

沖縄タイムス（2018 年 4 月 17 日付）に、「消費単価の低い外国人客 県の観光計画に非合理性」というタイトルの金城盛彦氏の論壇が掲載された。日本人観光客の目標消費単価が 9 万 5 千円であるのに対し、外国人の消費単価が 8

万 7500 円であるとして、消費単価が外国人観光客の方が低いとしている。「第 5 次沖縄県観光振興基本計画改定版」で「もうからなくても、インバウンドを推進する」ことを宣言しているとして非難している。

インバウンド観光の現状をみると、例えば、北海道ニセコ町では、2001 年にアメリカで発生した 9.11 同時多発テロの影響でアメリカに来ていた外国人スキー客が日本に来るようになり、特にパウダースノーの良さで夏休み期間に時差も少ないオーストラリアからスキー客が多く訪れるようになった。オーストラリアからのスキー客急増によりホテルやコンドミニアムなどの宿泊施設が外国資本に買収された。

しかし、ニセコ町は地元の産業、町民所得、財政収入などの面から観光の経済効果が低いとされている。ニセコ町では町外からの民間投資が多くある一方で、民間消費や農作物などの調達は町外に頼っている傾向がある。2017 年の一人当たりの所得額をみると、286 万円で 2015 年より 40 万ほど増加し道内で 77 位である。労働力では、有効求人倍率が全国や道内よりも高く、人手不足が深刻になっている。元々若年労働者が多くない農山村地域では観光産業で働く労働者を確保することが難しいこと

から、冬季の季節労働者を確保するため、外国籍の住民が増加している。ニセコ町に定住する若い外国人も増加し、インターナショナルスクールも誕生している。この他、観光開発の増加は地価上昇ももたらした。2016 年の標準値地価公示の値上がり率は 19.7 で全国 1 位であった。オーストラリア人以外もアジアや北欧からも投資が増加し、地元住民が手ごろに購入できる土地の確保が困難となっている。

地域振興の「地域」とは、観光振興の場合、都道府県レベルと市町村レベルに分けることができる。観光産業は波及効果の広い産業であるため、地域レベルのどこに設定するかによって観光振興が成功したか否かの見方が異なってくる。山口祥義氏は観光経済新聞（2013 年 8 月 31 日付）で「地域振興には「光」が、観光振興には「心」が求められている」と述べている。企業主義に走らず、地域主義、つまり、地域全体で考えるのが地域振興ではないだろうか。

南の島のコンビニ合戦 宮内 久光（琉球大学）

20 世紀最後の年、宮古島にはホットスーパーが 6 店だけ立っていた。そこに突如、ファミリーマートが 9 店舗の集中出店を行い、島に乗り込んできた。いわゆるドミナント方式による地域進出である。ここから、15 年にわたるホッパー vs. ファミマの戦いが始まった。

両陣営は島内にコンビニを次々と開店させていき、2003 年には島のコンビニ数は 21 店にまで膨れ上がった。この段階で、宮古島のコンビニ密度は 1 万人当たり 4.53 店となり、那覇市内（3.35 店／万人）はおろか、日本一の東京都（4.47 店／万人）よりも過密な状態となった。5 万人にも満たない南の島が、人知れず日本有数のコンビニ激戦区となったのである。

私は当時、沖縄本島同様に宮古島でもファミマが勝つ、と予想していた。が、結果はなんとファミマが 5 年間で 5 店も閉店に追い込まれたのに対して、ホッパーで閉店した店舗は 1 店もなく、ホッパーがファミマを事実上撃退した

のであった。ローカルチェーンがナショナルチェーンに勝つ、これは驚くべきことである。

理由を求めて、宮古島の人々に話を聞いてみた。「ホッパーの弁当は安くてボリュームがあり、口に合っているが、ファミマの弁当は高い割に量が少ない」「ホッパーでは卵、野菜、トイレットペーパーも売っているのに、ファミマは弱い」という声があった。宮古では、ホッパーはスーパー代わりに利用されていたようで、店側も島の消費者が求めている商品やサービスを追求し、店の判断で独自に提供していた。しかし、全国一律のサービスを基本とするファミマでは、那覇市内と変わらない商品・サービス構成で、それが宮古の消費者には敬遠されたのである。宮古島は若年層人口が少なく、中高齢者層が多いという人口構成も、ファミマにとっては不利だったようだ。

さらには、「ホッパーのオーナーは昔からよく知った人だけど、ファミマは知らん人」「フ

ファミマが宮古に来た時、わざとホッパーの近くに店を立ててホッパーを潰そうとしたのは、けしからん」「ファミマはきれいだから嫌」など、とても合理的とは思えない語りが次々と出てきた。

宮古島のコンビニ合戦からは、本土規格のも

のを離島に無理に持ってきてでも受け入れられないこともある、という結論が導かれる。離島振興を考える時も、その島は何が本当に必要なのか、どうすれば島に人々に受け入れられるのか常に考えていかなければならない、という教訓になるだろう。

一枚の図で語る地理トピック # 14

沖縄県鉄道沿線名所案内と海水浴

花木 宏直（琉球大学）

近代日本では、各地で鉄道網の整備が進められた。近代の鉄道は貨物輸送の比重が大きかったが、旅客輸送も充実していき、一般住民へ旅行の大衆化を進めた。そして、旅行の携帯冊子としてさまざまな鉄道沿線案内が刊行された。

近代の沖縄県にも、沖縄本島や石垣島、南大東島に鉄道があったことは周知の事実である。このうち、沖縄県営鉄道（通称「軽便」）は大正 3（1914）年に那覇～与那原間が開通し、大正 11（1922）年には嘉手納、大正 12（1923）年には糸満へも延伸された。西原村（現・西原町）や嘉手納町、高嶺村（現・糸満市）にあった精糖工場より那覇港への砂糖の輸送を主な目的としていたが、もちろん旅客も扱っており、通学など沿線住民の足となった。そして、開業 20 周年にあたる昭和 9（1934）年、『沖縄県鉄道沿線名所案内』が刊行された。

『沖縄県鉄道沿線名所案内』には、「沖縄県鉄道略図」（図 1）や那覇駅の時刻表とともに、沿線の主な名所が写真を添えて紹介されている。「沖縄県鉄道略図」にて、筆者がとくに興味をひかれた名所は「与那原海水浴場」である。

「与那原停車場」の紹介欄には、与那原海水浴場について以下のように説明されている（文字は適宜常用漢字に改めた）。

駅から北へ約二町出ると、白砂遠く打続く清浄な汀に達する。この浜辺こそ水澄みて波静に、遠浅にして水温適度、真に天下稀に見る

絶好の海水浴場である。

中城湾頭に位して左は中城東海岸一帯より遙に勝連半島を眺め、右は知念半島を扣へ津堅島并湾口を擁振して眺望実に絵の如く風向の美又讚賞するに足るのである。

深く湾入せる海辺一帯は広義豊かにして数万人を容るゝに余りあるのみならず、その広々とした砂浜が一面真白い砂を布き詰めて塵芥の跡もない清らかさ、而かもその砂辺を碧々と澄むだ海水が静かに洗つてゐる様は、ほんとうに生命も延びるやうな心地好き感じを与へて呉れる。

夏季浴客の遊ぶ者逐年相加はり海水浴場としての設備も漸次整つてきた。

与那原海水浴場のあった海域は、現在は埋め立てられている。やや誇張した表現ではあるものの、かつてはその内容にふさわしい美観がみられたことが推察される。また、海水浴客の増加や、海水浴場として整備の進展という記述が気になる。

『沖縄県鉄道沿線名所案内』にはもう 1 か所、海水浴場の記述がみられる。それは、読谷村にある「泊城」の紹介欄に、「風景の絶佳と清涼の快味と相俟つて推賞に余りある行楽地であると共に夏季は家庭的海水浴場としても亦好適の地たるを失はない」と記される。この海水浴場は、現在の渡具知ビーチにあたるとみられる。記述通りに理解すれば、与那原海水浴場よ

り小規模で来訪者が少なく、家族向けの海水浴に適すると考えられたのであろう。

沖縄県の海水浴場は、米軍統治下に米軍人を対象として成立し、本土復帰前後には那覇などの中南部の都市住民も行うようになり、本土復帰後はリゾート開発が進み沖縄県民というより本土からの観光客向けに充実していった。また、有料ビーチなど本土にはないあり方が形成された。一方、『沖縄県鉄道沿線名所案内』をみると、昭和前期には海水浴場の萌芽がみられた様子がうかがえる。実際の海水浴客数は決して多くはなかったと推察されるが、鉄道の起点

である那覇などの中南部の都市住民を対象として、いずれも鉄道の終点にある与那原海水浴場や泊城の家庭的海水浴場を行楽地に設定することで、休日の旅客輸送を取り込もうとする動きと捉えられる。

『沖縄県鉄道沿線名所案内』には他にも、嘉手納駅の北部にある「比謝川流域」に貸船業があり、ボートやテンマ（伝馬船）で遊覧できることから、大分県の景勝地にちなんで「琉球耶馬溪」と紹介されている。昭和前期、沖縄本島では自然を楽しむレジャー空間が少しずつみいだされはじめた。

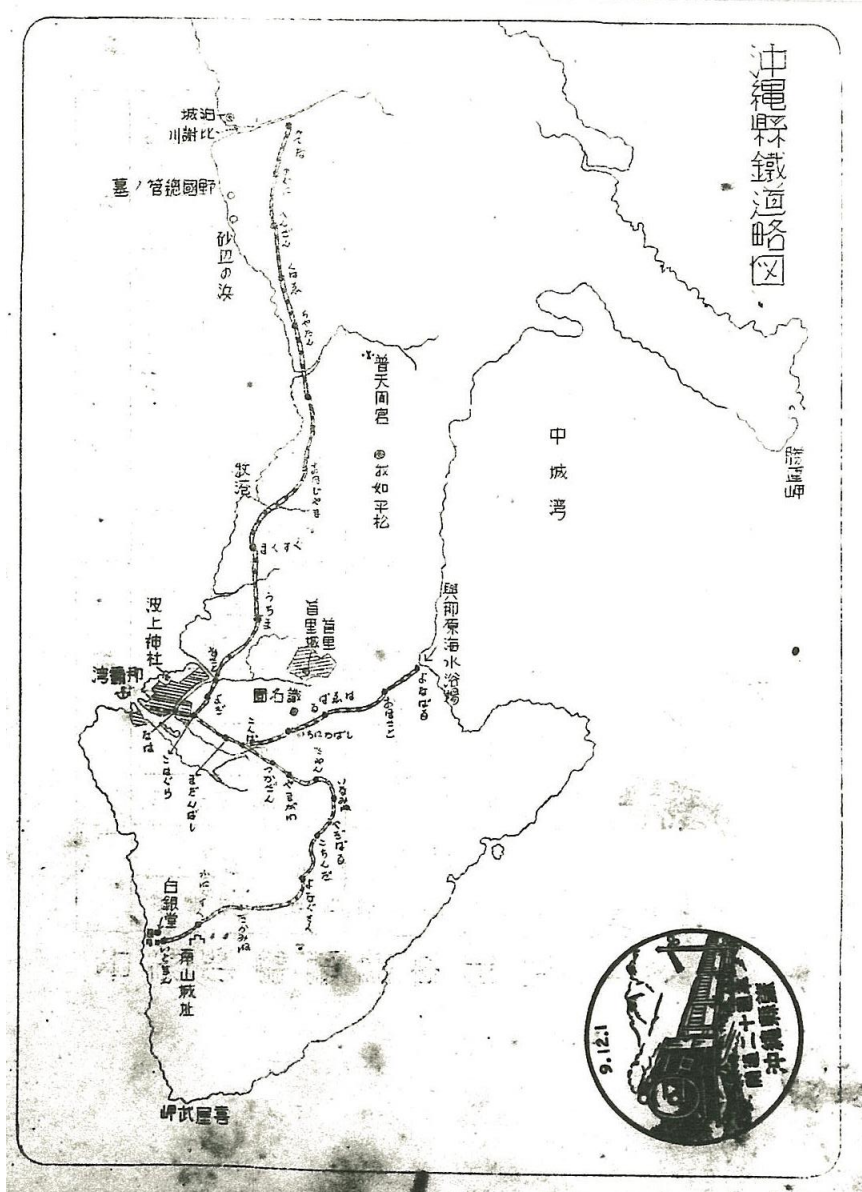
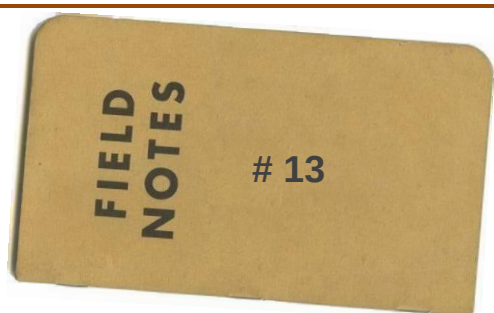


図1 沖縄県鉄道略図
出典：沖縄県営鉄道管理所編・発行『沖縄県鉄道沿線名所案内』，1934。



カルスト研究との巡り会い

羽田 麻美（琉球大学）

2017 年 10 月に琉球大学地理学教室に着任致しました、羽田^{はだあさみ}麻美と申します。カルスト地形学を専門にしています。石灰岩のない横浜市と茅ヶ崎市で育った私がカルストに興味を持ったきっかけは、大学 2 年の時に参加した山口県秋吉台巡検での、後の恩師となる漆原和子先生との出会いでした。3 日間の巡検では、秋吉台の石灰岩の 3 億年の地史から、ドリーネ・ウバーレが卓越する温帯型カルストの地形形成、カルスト台地を流下する地下水系のしくみ（ポノ

ール-洞窟-湧水のつながり）などを調査・観察し、他の岩石とは異なる石灰岩特有の自然のしくみに興味を抱きました。

卒業論文以降、石灰岩の溶け方やその地域差について、ミクロな視点で考えてきました。石灰岩のピナクル表面には、水に溶けてできた溶食地形であるカレンが観察できます。写真 1 はこれまで調査した (a) 山口県秋吉台、(b) 福岡県平尾台、(c) 沖縄県本部町山里、(d) スロベニア・リピツァの 4 地点の石灰岩の写真です。(a) (c) (d) は古生代～中生代の石灰岩で、

(b) は岩質の異なる大理石（結晶質石灰岩）です。いずれも古い時代の緻密な石灰岩ですが、カレンの形状と溶けて形を変えていくプロセスは、気候や岩質が違えば異なるのか不思議に思いました。その答えを探るため、野外でのカレンの計測や、室内の条件を整えた環境下でカレンを再現させる実験、野外に石灰岩を設置する実験をおこない、カレンの形状の地域差と溶けるプロセスを調べました。これらを基に、亜熱帯気候下にある沖縄の石灰岩の溶食特性についてさらなる調査を進めていきたいと思っています。

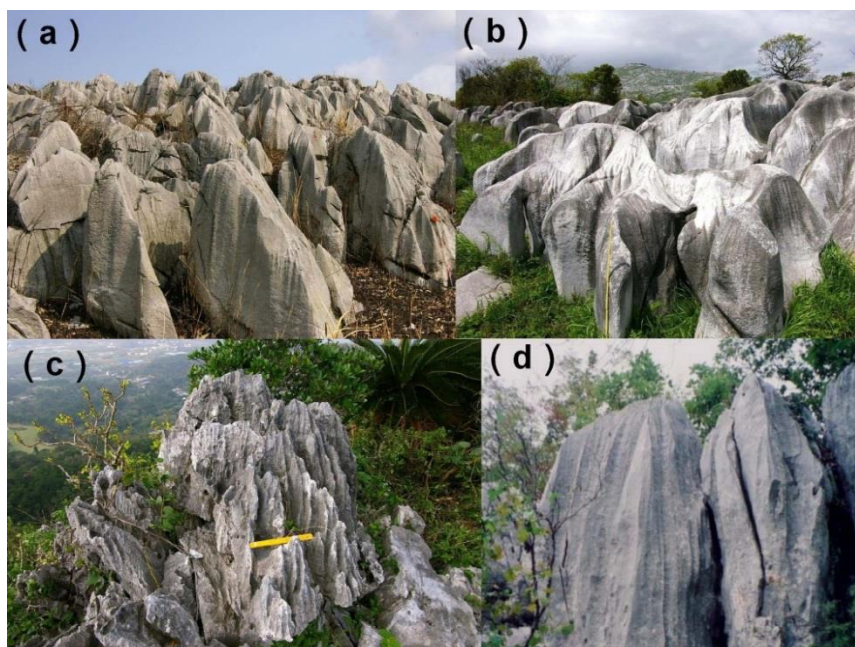


写真 1 日本とスロベニアのピナクルとカレン

(a) 山口県秋吉台、(b) 福岡県平尾台、
(c) 沖縄県本部町山里、(d) スロベニア・リピツァ

沖縄に来て約7ヶ月が過ぎ、目に見える景色や人の暮らしが新鮮で、毎日のように驚きと発見がある一方で、私はこれまで調査地のほんの一部しか沖縄を知らなかったのだと痛感しています。これまで何時間もかけて調査地に向かい、短期間でデータを取って東京へ帰る調査から、いつでもすぐに石灰岩を見に出られる場所に来ることができました。沖縄には、本州には

みられない円錐カルストやライムストーンウォールなどのカルスト地形が形成され、なぜこのような地形が作られるのか疑問があります。石灰岩地に住む大きな利点を生かし、フィールドで時間をかけてデータを積み上げていきたいと思います。沖縄地理学会の会員の皆様には、学会や巡検の場などご指導頂けますと幸いです。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

●原稿募集／会員が関わった刊行物の情報提供のお願い

本紙のコラム「一枚の図で語る地理トピック」(図または写真 1 点, 文字原稿 1200~1600 字程度)と「FIELD NOTES」(原則文字原稿のみ 800~1200 字程度)を募集いたします。次号は 11 月頃発行を予定していますので、10 月末までにご投稿ください。また、本紙では会員が関わった刊行物を紹介しますので、書誌情報をご提供くださいますようお願いいたします。

●会員の受賞●

●渡久地 健さんが沖縄タイムス出版文化賞正賞を受賞

沖縄タイムス社が主催する第 38 回沖縄タイムス出版文化賞の贈呈式・祝賀会が 2018 年 2 月 7 日に那覇市内ホテルであり、渡久地 健さんの著書『サンゴ礁の人文地理学』が受賞しました。発行元として古今書院も受賞し、編集部の関田 伸雄さんも賞状と賞牌を受け取りました。

2018 年 2 月 5 日付の沖縄タイムスには、「奄美から宮古・八重山に至るまで、丹念なフィールドワークで漁場や自然環境を調査・分析した著者の集大成と言えるだろう」と記載されています。祝賀会には地理学関係者以外に他分野の関係者も多く訪れ、渡久地さんの受賞を喜んだ。



渡久地さん(左)と関田さん

●会員が関わった刊行物●

●名護市史編さん委員会編『名護やんばるの自然誌』(名護市史本編・1 自然と人 I), 2017 年 12 月 22 日, 名護

市役所発行, A5 判, 575 ページ。会員の島袋 伸三さんが「刊行のことば」を、府本 禮司さんが「地形の形成」を、渡久地 健さんが「サンゴ礁地形ならびに海岸地形」を執筆している。

●会員消息●

●羽田 麻美さんが 2017 年 10 月に琉球大学法文学部人間科学科の准教授に着任されました。

●町田 宗博さん・宮内 久光さん・廣瀬 孝さん・渡久地 健さん・羽田麻美さんの所属が 2018 年 4 月に、琉球大学学部再編により、法文学部人間科学科から国際地域創造学部国際地域創造学科へ変更になりました。

活動日誌 (2018 年 1 月~2018 年 6 月)

▼2018/01/22(月) 2017 年度第 1 回幹事会(琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30~19:00)議題:①会務の報告, ②その他

▼2018/03/26(月) 2017 年度第 1 回幹事会(ばいかに沖国大前店, 18:30~19:25)議題:①会務の報告, ②沖縄地理第 18 号原稿募集, 編集委員会の開催日程について, ③2018 年度総会・大会の準備, ④封筒の印刷について, ⑤その他

▼2018/05/7(月) 2017 年度第 3 回幹事会(沖縄国際大学 5 号館 6 階経済学部会議室, 18:30~19:00)議題:①会務の報告, ②2018 年度総会・大会の準備, ③名誉会員について, ④表彰委員会について, ⑤その他

.....
編集後記 本号も発行が遅れたことをお詫び申し上げます。今号も小川 護会長と渡久地 健さんにご高閲(校正)をお願いしました。また、原稿を多忙の中、お寄せいただいた皆様には感謝申し上げます(上江洲)。